The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	臨床哲学的空間 [Vol.2]
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 2, p. 30-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10546
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

昨年12月に創刊された『臨床哲学のメチエ』は、今後季刊として年に４回発行していくことになった。前号はちょうど「冬の号」にあたり、本号は「春の号」となる。

当研究室では98年度中に計３回の研究会を開き、いずれも「不登校」を中心テーマとした教育について問題を集中的に論じた。（教育に関する研究会は次年度も継続する予定。）本号は、前号に引き続き「教育の臨床哲学」を特集として組み、これまでの取り組みの成果を部分的ながら発表することになった。第１回研究会の参加者からの声、第２回研究会の山田さんの講演を掲載したほか、第３回研究会にて討論された内容にもとづいて大学院生の寺田さんと森さんとに文章を寄せていただいた。

一方、臨床哲学の講義・演習の方では、「ケアとは何か」を核となるテーマとして、看護論、介護論、他者論、共感論、家族療法など様々な角度からの検討を行った。なかでも村田久行さん（「傾聴ボランティア」の実践）や信田さよ子さん（「アディクション・アプローチ」）をお招きしてそれぞれのテーマについてお話していただき、活発な議論を行うことができた。

また医療研究グループは、「ニューライフガラシア」にて２回目のボランティア実習を行い、「傾聴」（お年寄りの話にひたすら耳を傾けることでケアを行う方法）を試みた。お年寄りに限らず、誰かの話を聴いて、「ああよかった」と話をした人も聴いた人も思えるときがある。今後こうした実践を通じて、「聴くことの意味」を方法や理論という枠組みを越えて臨床哲学的に深めることが当面の課題である。次号でその成果を発表する予定である。

臨床哲学的空間

本号の最後に掲載したのは、「セクシュアリティに臨む哲学」と題する研究会にて、大学院生大北さんが提出した文書である。当研究会はまだまだ準備段階の活動を続けており、小規模ながら映画会や討論会を通じて、研究会の進め方を模索している。映画を議論の題材とするのは、単にセクシュアリティをテーマにした作品を批評・分析したりするためではない。むしろ、ジェンダーやセクシュアリティに関する振る舞い・イメージを映像や映画を通して身につけてゆく、その過程を“語り合う”ことを重視している。研究会への積極的な参加を期待する。　（編集者）

次回（通算第15回目）
臨床哲学研究会のお知らせ
講師：浜田寿美男氏
テーマ：生きるかたちを伝える場としての学校
とき：４月17日午後１時半より
ところ：大阪大学待兼山会館会議室